

国際協力特別賞

ブランコが止まらない時に出来ること

横須賀学院高等学校 2年 藤田 ちはる

東日本大震災当時、まだ幼稚園生だった私は乗っていたブランコが止まらなくなった感覚といつもと違う大人の様子にただただ怯えていた事を覚えています。あれから11年経った今年の夏、私はある活動を始めました。友人が代表を務めている防災普及学生団体「玄海」のメンバーになったのです。最初はよくわからないまま入った団体でしたが、今では代表に同行して関東地区防災サミットに神奈川県代表として参加したり、イベントで子どもたちに防災を教えられるようになりました。この団体で学んでいる事は自分の命、そして大切な人の命を守るために必要なことです。ブルーシートでの担架の作り方や防災倉庫に備蓄されている防災グッズなどはもし私がこの活動を始めなければ知らずに過ごしていたことでしょうか。震災から11年経った日本の学校教育では、いまだにマニュアル通りの逃げて終わりの避難訓練が続いています。ですが、私が玄海の活動で学んだことは常識的に知っている必要があります。数字の数え方と同じくらい大切なことでした。東北地方太平洋沖地震で世界にも類を見ない未曾有の大災害に襲われた日本は、あの悲劇から一体何を学んだのでしょうか。そして世界に堂々と発信できることはあるのでしょうか。その発信は世界中の人を救うことはできるのでしょうか。2016年の朝日新聞の調査によれば過去の10年間に起きた災害のうち低中所得国で起きた災害は53%に対し、犠牲者は低中所得国が93%を占めていたようです。もちろん建築基準等によりこの差が生まれたとも言えますが、私は根本にあるのは防災意識の低さがあるのではないかと思います。インドネシアで2004年に発生したスマトラ沖地震では16万人が死亡しています。このような大惨事になってしまった背景にも防災意識の低さが関係しているのではないのでしょうか。そこで私はこの国に合った防災教育とはどのようなものかと考えました。もしかしたら幼い頃からたびたび起きる大雨や地震を当たり前のように捉えてしまっているのかもしれないかもしれません。世界中の全ての国において天変地異を物理的に無くすことは困難であっても、それによる被害を最小限に抑えることは出来ると思います。私たち日本人が体験してきた地震の恐ろしさ、世界共通用語でもあるTSUNAMIの恐ろしさは私たちにしか伝えることができません。日本が世界の防災教育の先進国となるためには義務教育で共助の意識づけを行うこと、そして震災の悲劇を繰り返さないためにも防災に関するノウハウを次世代にしっかりと伝えていくことが必要不可欠であると考えました。そこで私は現在の活動を通じて文化や生活様式の違いとらわれない防災意識の普及をしたいと思います。そこで核となるキーワードは「命」です。文化や生活様式は国によって大きく異なりますが、「命を守りたい」「助かりたい」という思いは人間という生き物に本能的に身につけていることだと思います。そのために防災のみならず目の前の人の命を守る行動が学べる新たなプログラムを構築することで、この思いは国境を超えて世界中に届くと考えました。まずは「本当に命を守る防災訓練」の実現に向けて、玄海で体験型防災イベントや同世代に人気のあるSNSなどの発信方法での防災普及に努めたいと思います。その後各国に見合った防災プログラムを玄海の仲間と考え、実行していきたいです。防災において技術の隠し合いや格差は無用です。1人でも多くの人を守るためには世界中の人々が手を取り合って、自分の国が持っている知識や技術を共有していくことが大切だと思います。防災に国境はありません。世界が協力できる素晴らしい機会ではないのでしょうか。防災は様々な環境の中で暮らす世界の人々がひとつになる為の手段であり、あの日を経験した私たちが普及していくべき事だと思います。